番狂わせな織斑一夏～つまりはチートな物語～

ナンテコッタイ!!!＜(^o^)＞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

番狂わせな織斑一夏～つまりはチートな物語～

【Ｎコード】

Ｎ９８８３Ｗ

【作者名】

ナンテコッタイ！！！＜（＾ｏ＾）＞

【あらすじ】

ＩＳの一夏チートものです。主人公チートものが苦手な人は見ないほうがよろしいかと。不定期更新ですので注意してください。できる限り感想・アドバイスをいただきたいです。

プロローグその１（前書き）

人生オワタ＼（＾ｏ＾）／です
この作品は三作目となりますが、相変わらずなれません
更新速度は遅いですが、皆さんよろしくお願いします

プロローグその1

「ねぇ、束さん」

研究部屋のような散らかった部屋で、少年は女性に聞く。

束「ん？何、いっくん？」

束と呼ばれた女性は、顔を少年に向けながらＰＣのキーボードを叩いている。

「この理論はＩＳに使えそうじゃない？」

束「いっくんすごいよ～。小学生でこんなことできるなんて、私ほどの天才だよ～」

「まさか。束さんほどじゃないよ」

いっくん。そう呼ばれた少年は、ＩＳの開発をしているようだ。『ＩＳ』。正式名称「インフィニット・ストラトス」。宇宙空間での活動を想定し、開発されたマルチフォーム・スーツ。少年は小学生でありながら女性と開発を続けているようだ。

束（ホントにいっくんはすごいよ。これはいずれ私を追い越しちゃうかもね～）

女性はそんなことを考えながら、開発に戻っていった。

プロローグその2（前書き）

誤字改正しました

プロローグその2

「束さん」
束「なーにいっくん？ってあれ？いっくん、それ」
「俺、男なのにＩＳを起動させちゃったんですが」

いっくんと呼ばれた小学４年生くらいの少年は、男でありながらＩＳを起動させてしまった。

束「うわー、すごい。いっくん、これは天才の束さんでも予想できなかったよ」
「どうするんですか」
束「とりあえずちーちゃんを読んでみたら？」
「そうですね。おーい、千冬姉ー」

千冬姉。その言葉から分かるように、名前は千冬というらしい。少年の姉のようだ。

千冬「なんだ一夏？って、なぜお前がＩＳを！？」
一夏「いや、束さんの研究を手伝ってたら、なぜかこうなって」
千冬「まぁいい。いいか一夏。ＩＳを起動できることは隠しておけ。何が起きるかわからんからな」
束「そうだねー。でもちーちゃん。何が起こるかわからないから、一応いっくんを鍛えておいたほうがいいんじゃないかなー」
千冬「そうだな。一夏、お前にはＩＳの戦闘のことを教えておく。私の練習場に暇なときは来い」
一夏「わかったよ」

ＩＳを起動させてしまった、一夏という少年の運命は……

プロローグその２（後書き）

次回より本編へと移ろうと思います

第一話　クラスメイトは全員女（前書き）

小学生のとき、ＩＳを起動させてしまった一夏は、ＩＳ学園へ通うこととなる

第一話　クラスメイトは全員女

「全員揃っていますね。じゃあＳＨＲはじめますよー」

そう言って微笑む副担任の山田真耶先生。容姿は子供っぽいがスタイルは規格外のようで。まあＩＳ学園の教師をやっているのだからすごい人だろう、と一夏は考えている。

一夏（それにしてもこれはすごいな。なんたって――――）

なんたって、クラスメイトが全員女な上、そのクラスメイトが各々視線を送ってくるのだから。

一つは驚愕。

普通ＩＳ操縦者は全員女だ。ＩＳ学園に男がいればそれはそれは驚くだろう。

一つは興味。

ＩＳ操縦者は普段男と接触をあまりしない。興味をもってもおかしくはない。

一つは嫌悪。

女尊男卑ご時世だ。男に良い感情を抱かない女性もいるはずだ。

一夏（ははっ。この状況、弾なら喜ぶかもな）

山田先生は何か言っているようだが一夏は考え事をしていて気づかない。

山田「……くん。織斑一夏くんっ」
一夏「……はっ。すいません、考え事をしていて気づきませんでした。自己紹介ですよね？」
山田「はいそうです。ではよろしくお願いします」

一夏は立ち上がり、振り向く。やはり全員こちらを見ているようだ。前日、名簿と写真が家に届いていたため、全員の顔と名前を覚えている。

一夏（えっと、あれが鷹月さんで、あれが布仏さんだったかな？それにこのクラスには箒もいたんだよな。っと、自己紹介自己紹介）

クラスメイトの顔と名前を頭の中で一致させる。しかし、早く早く♪という一部を除く女子の視線を感じてしまったため、自己紹介の内容を考える。

一夏「えっと、皆さんニュースで知っているはずですが、俺が世界で唯一ＩＳを使える男の織斑一夏です。趣味は読書と機械いじりで、特技、と言っていいのかわかりませんが家事全般は中学時代の友達にチートレベルと言われました。よろしくお願いします（さすがに自分で専用機を造ったとか、束さんに認められた愛弟子だとか、ブリュンヒルデの弟だとか言ったら余計な混乱を招くよね）」

ぺこっ、とお辞儀をし、お得意の営業スマイル。すると……

「「「きゃ～～～～～～～！！！」」」

黄色い歓声が上がった。

「は、鼻血が……」

「我が生涯に、一片の悔いなし……」

みんな営業スマイルにやられてしまったようだ。明らかに死亡フラグの奴がいたようだが。

昨年の１２月、一夏は千冬にこんなことを言われた。

千冬「一夏、お前はＩＳ学園に入れ」
一夏「へ？」
千冬「お前がＩＳを使えることは、いずれ知れ渡るだろう。そんなことになったら、お前を解剖したいという科学者や、渡して欲しいという国家などがたくさん出てくるはずだ。そうなる前に保護という形にしてもらう。ＩＳの使用ができることを公表するのは入学試験の少し前でいい」
一夏「わかった」
千冬「心配するな。私に勝ったんだ。問題はない」
一夏「そうだな。わかった、行くよ。ＩＳ学園」

そして、ニュースで全世界に知れ渡り、案の定マスコミや科学者、あらゆる国家の人間が押しかけてきた。それをすべてあしらい、一夏は今に至る。

パァンッ！

頭がいい音を立ててはたかれる。全く、束さんにも認められた頭がバカになったらどうするんだ。そう考えながら振り向くと……

一夏「あれ？千冬姉がなんでここに？」

パァンッ！

またはたかれた。

千冬「学校では織斑先生だ。それにここにいるのは教師をやっているからだ。織斑、なんだこの騒ぎは」

一夏「あ、あぁ。自己紹介をして、笑顔でお辞儀したらこうなりました」

千冬「なら騒ぐほうが悪いか……全く、織斑も織斑だ。少し暗いくらいにしておけよ。沈めるのが面倒だ」

職業不明でなかなか帰ってこないと思ったら、まさかこんなところにいたとは……そんなことを考える一夏である。

山田「あ、織斑先生。会議は終わられたんですか？」

千冬「ああ、山田君。挨拶を押し付けてすまなかったな。騒がしかっただろう、主にコイツの自己紹介の直後」

山田「い、いえっ。副担任ですからこれくらいしないと……それに、元気があるのはいいことです」

山田先生は、千冬姉に尊敬の目を向けている。憧れているのだろうか。

千冬「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者にするのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。理解できなくてもしろ。逆らってもいいが、それ相応の指導があるということだけは覚悟しておけ。いいな」

軍的なノリである。千冬は実際にドイツの軍にいたこともあるの

だが……

困惑の声が出ると思っていた一夏であったが違っていた。上がったのは一夏の自己紹介の時と同じ、黄色い歓声だった。

「キャーーーーー！千冬様よ！本物の千冬様だわ！」

「ずっとファンでした」

「私、お姉さまに憧れてこの学園に来ました！北九州から！」

いや、出身は関係ないだろう。

きゃいきゃい騒ぐ女子。うっと押しそうな目で見る千冬姉。これってカオス？

千冬「……毎年毎年、よくもこれだけの馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。これはたまたまか？それとも、私のクラスだけに馬鹿者を集中させているのか？」

たぶん後者である。

「きゃあああああ、もっと叱って！罵って！」

「ああっ、憎まれ口を叩くお姉さま！だけどそこに痺れる憧れるッ！！！」

変態の集まりか、ここは？

「っていうか織斑くんって、あの千冬様の弟……？」

はい。紛れもない実弟です。

「それじゃあ、世界で唯一男で『ＩＳ』を使える男の子っていうのもそれが関係して……」

たぶんそれはないと思います。どちらかというと束さんの愛弟子というほうが影響力は強いと思います。

「いいなぁ。代わって欲しいなぁ」

嫌です。千冬姉はああ見えてほんとは優しいです。

千冬「さあ、ＳＨＲは終わりだ。諸君らにはこれからＩＳの基礎知識を半月で覚えてもらう。基本動作は半月で体に染み込ませろ。いいか？いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ。私の言葉には返事をしろ」

やっぱり軍的ノリだ。そう考えながら、ＳＨＲは終わっていく。

第一話　クラスメイトは全員女（後書き）

一夏（以下、一）「なあ、作者よ」

作者（以下、俺）「なんだ一夏」

一「千冬姉に勝てるＩＳ技術で、束さんに認められた頭脳を持つ束さんの愛弟子で、まだまだ公開されてない実力もあるって、俺をチートにしすぎたんじゃないか？」

俺「まあまあ、いいじゃないか。メタ発言だが原作通りにやって、誰かが傷つくのは嫌だろ？」

一「そうだな。もっと前向きに考えるか」

俺「一夏、次回予告」

一「あ、ああ、そうだな。次回は幼馴染との再会だ。都合により変更もあるかもしれないが、そこは目をつむってくれ」

俺「というわけだ」

一「じゃあ、またな～」

第二話　幼馴染（前書き）

箒との再会

第二話　幼馴染

一夏「あー……」

一時間目終了後、織斑一夏は疲れている。なぜかって……？

一夏「こんな女子ばかりじゃ精神的に滅入ってしまうよ……」

女子ばかりのせいで、精神がすり減っているからである。

一時間目のＩＳ基礎理論授業。束さんと開発をしていた俺にとってはつまらない授業である。その授業中、つまらないから眠くなる。そういうわけはなかった。というか眠れるはずがなかった。授業中も興味とか好奇心的な視線を送ってくるため、プレッシャーを感じてしまうからである。

「世界で唯一ＩＳを使える男」とは、大変有名である。そのため新入生だけでなく在校生までもが一夏のことを知っていて、同じような視線を送ってくるわけで、精神的な疲れが抜けない一夏というわけである。

一夏（そして今の状況……）

ただでさえ有名な織斑一夏である。朝のＳＨＲのせいで知れ渡ることになったブリュンヒルデ、織斑千冬の弟というプロフィールまで追加され、ますます有名になったわけである。

一夏（ここに束さんに認められた頭脳を持つとか、束さんの愛弟子とか追加したら……）

そんなことを考え、ブルッと寒気を感じてしまう一夏。

「……ちょっといいか？」
一夏「箒か……」

話しかけてきたのは篠ノ之箒。一夏の幼馴染。一夏の師、篠ノ之束の妹。昔通っていた剣道場の娘。髪型は昔と変わらないポニテである。

一夏「廊下でいいか？」

教室にはいたくない。こいつと一緒に教室で話せばさらなる噂を舞い込んでしまう。そう思い廊下を提案する一夏。

箒「早くしろ」
一夏「おう」

しかし一夏の考えは甘かった。あっという間に包囲網完成。箒との会話は聞き耳を立てられるのがオチだろう。

一夏「久しぶりだな、箒。去年の剣道大会、全国大会で優勝したってんだってな。おめでとう」
箒「な、なんでそんなことを知ってるんだ」

顔を赤らめる箒。

一夏「知ってるも何も、新聞で見たし……」
箒「なんで新聞なんか見てるんだっ」
一夏「いや、毎日見るのが普通だろ」

一夏は、チートな部分を除けば常識人である。毎日新聞を見て、

テレビでニュースを見る。それで情報収集をするのだ。まあ大半の状況は束さん直伝の裏ルートから入手するのだが……

一夏「まあ、改めて久しぶり。お前とは六年ぶりか？束さんは元気か？」

箒「ふん」

束を話題に出したのが不味かった。箒と束は姉妹仲が上手くいっていない。だかあらである。

一夏「ろ、六年ぶりか？箒ってすぐわかったぞ」

箒「え……」

一夏「だってほら、髪型一緒だし。なにより昨日名簿と写真を見たんだ。それくらいわかる」

チャイムが鳴り響く。二時間目の始業のチャイムだ。

一夏「ほら、もどるぞ」

箒「わ、わかっている」

一夏は、千冬に叩かれる前に席へ戻った。

第二話　幼馴染（後書き）

一「いやー、箒とは久しぶりに会ったな」

俺「なんだ、嬉しかったのか？」

一「そりゃ嬉しいだろ。長い間会えなかったんだ。再開して嬉しくないはずがない」

俺（箒さんや。哀れですな……）

箒（以下、箒）「一夏！」

一「うおっ、箒！？」

箒「ま、まあ久しぶりだったな」

一「お、おう」

俺「箒よ」

箒「なんだ？」

俺「明らかにお前の行為に気づいてないぞこの唐変木」ゴニョゴニョ

箒「なっ／／／」

一「どうした箒。顔赤いぞ」

箒「な、なんでもない！」

俺「まあまあ。箒、次回予告」

箒「あ、ああそうだな。次回、一夏とセシリアが出会う。そして喧嘩が勃発。クラスだいひょ……」

俺「おーっと。ネタバレはいかんぞ」

箒「……セシ……惚れ……」

俺「見たらいけないよ読者のみなさん」

一「何を言ってるんだ箒？」

俺「お前本当に唐変木だな」ボソッ

一「何か言ったか？じゃあこの辺で終わりにするか」

箒「ふん」

俺「死ねこの唐変木」ゲシッ

一「ひどっ。またな～」

第三話　セシリア・オルコット（前書き）

セシリアとの口論が一方的になりすぎたかな？

第三話　セシリア・オルコット

山田「――――であるからして、ＩＳの基本的な運用は――――」

山田先生の授業は、正直つまらない。一夏は頭の中でそう考える。周りの女子の席を見ると、うなずきながらノートを取ったり、教科書を見て線を引いたり、それぞれやりやすい方法で勉強しているようだ。

一夏（俺は束さんと一緒にＩＳを開発した人間なんだ。聞いても意味ないだろ……）

そう、一夏は束の愛弟子兼助手。こんな授業を聴く必要はないのだ。一夏は怪しまれると嫌なため、一応教科書を開いてノートを取っておく。

「な、なに？」

一夏の視線に気づいた女子が、期待を孕んだ目を向ける。

一夏「あ、いや。なんでもないよ。ゴメン」

そう聞いた女子は、心なしかガッカリしていた。

山田「織斑くん、何かわからないところはありますか？」

あるわけないだろう。

一夏「ないですよ。授業を続けてください」

そう言うと。

山田「わからないところがあったら訊いてくださいね。なにせ私は先生ですから」

一夏「は、はい。ありがとうございます」

正直、どうでもいい。わからない訳がないのだから

千冬「山田先生、授業の続きを」

山田「はい」

こうして授業は続いていく。

「ちょっとよろしくて？」

一夏「……」

こいつはセシリア・オルコット。所詮代表候補だ。

セシ「ちょっと、聞いてますの？」

一夏「うるせえよ」

女尊男卑を体言する糞みたいな女子。正直こういう奴が一番嫌いだ。

セシ「まあ！なんですのそのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度があるのではないのかしら？」

一夏「……」

ここは穏便に済ませるべきである。

一夏「悪いな。俺、君が誰か知らないし（名簿で見たから知ってるけどな）」

セシ「わたくしを知らない？このセシリア・オルコットを？イギリスの代表候補にして入試主席のエリートであるこのわたくしを！？」

一夏「お前、馬鹿だろ？」

セシ「なっ！」

一夏は続ける。

一夏「たしかに、お前はエリートだろう。代表候補なんだからな。だが、相手のことをよく知らないで自分の立場を押し付けるような奴がエリートなんて、聞いて呆れる。しかも所詮代表候補だ。代表ならいざしらず、テメェは各国の代表候補全員を知ってるのか？ああ？ほら答えてみろよ？」

セシ「うっ……」

一夏「入試主席ってことは、教官を倒したってことだろう。だが所詮はその程度。千冬姉を……おっとこの話はしたらいけないんだったな。それに俺は入試免除だ。それ相応の実力はあったんでな」

三時間目の始業のチャイムが鳴る。ふん、話はここまでだ。

セシ「っ……！またあとで来ますわ。逃げないことね！よくって！？」

雑魚の分際でよく吠える。

そして授業が始まっていく。

千冬「おっとそうだった。授業を始める前に、クラス対抗戦に出るクラス代表を決める。クラス代表は対抗戦だけでなく委員長のような役目もしてもらう。決まったら一年間変更はないからそのつもりで。」

千冬はそんなことを言ってきた。
面倒なことが多い仕事。なるやつはご苦労さんだ。

「はいっ。織斑くんを推薦します！」

グハッ。そういえば俺は注目の的だった。

「私もそれがいいと思います！」

ゲハッ。やめてくれ。織斑一夏のライフはもうゼロよ！

千冬「候補は織斑一夏。他にいないか？自薦他薦問わないぞ」
一夏「お、俺はそんなのやりたくないぞ！」
千冬「他薦されたものは拒否権なしだ。他にいないのか？無投票当選になるぞ」

イヤだ。なりたくない。そう考えていると……

セシ「待ってください！納得がいきませんわ！」

糞女（クソアマ）が反論する。

セシ「そのような選出は認められません！だいたい男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！」

セシリアが反論する。

セシ「実力で言えばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！」

明らかに日本人をバカにしている言葉。我慢我慢……

セシ「だいたい文化としても後進的な国で暮らさなければならないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で――――」

バキッ。何かが折れる音が教室に響く。それは織斑一夏が持っていたシャープペンを折った音だった。

一夏「だったらテメェご自慢のイギリスに帰れや！大体、ＩＳを造ったのも、ブリュンヒルデもテメェの言う極東の猿なんだがそこんとこどうなってんの？あと、俺は入試免除だっつっただろうが。俺の実力も知らねぇクセに勝手にクラストップの実力とか決めてんじゃねぇよ糞女（クソアマ）！文化だって、世界一のメシマズ大国が何言っちゃってんの？」

キレた一夏は止まらない。

セシ「なっ……！？」

セシリアは顔を真っ赤にしてキレていた。

セシ「あっ、あっ、あなたねえ！私の祖国を侮辱しますの！？」

一夏「へぇ、イギリスの貴族様は他国を侮辱して喜ぶクセに、自国を侮辱されたらキレるような、自己中心的な人間しかいないんだな。ああ、これはマスコミに報告しないとなー。それに、この場にいる日本人全員を敵に回している分際で何ほざいちゃってんの？バカなの？死ぬの？」

怒涛の口喧嘩。一夏が完全に押している。

セシ「決闘ですわ！」

バカだコイツ。俺に勝てるわけねぇだろうが。まあこいつに吠え面書かせんのも悪くねぇ。

一夏「ふん、あとで後悔しねぇようにな！」
セシ「わざと負けたら私の奴隷にしますわよ」
一夏「男を侮るなよ、売女（クソビッチ）。真剣勝負で手を抜くわけねぇだろうが」
セシ「そう？何にせよちょうどいいですわ。代表候補生のこのセシリア・オルコットの実力を試すまたとない機会ですわね！」

バカだコイツ。自分が実力を試される側だってことに気づいちゃいねぇ。

一夏「ハンデはどうするよ」
セシ「あら？早速お願いかしら？」
一夏「バカかテメェ？俺が付けるんだよ」

クラスで爆笑が起こる。一夏の実力を知らないのだからしかたがないだろう。

「お、織斑くんそれ本気？」

「男が強かったのって大昔の話だよ」
「代表候補生相手に、それは言いすぎだよ」

はぁ。ここまでくるとウザくなってくる。

一夏「いいかテメェら。たとえＩＳがあっても、女が威張っていること自体おかしいんだよ。世界にＩＳのコアは何個あるか知ってるか？鷹月さん、答えてみろ」
鷹月「４６７個」
一夏「そうだ。地球の総人口は６０億人オーバーだ。その約半分が女性だとすると、女性は世界に３０億人程度になる。その全員がＩＳ適正を持っているわけではない。さらにその全員がＩＳに触れることができるわけねぇだろうが。テメェらは所詮運がいいだけだ。しかも今までの常識に当てはまらねぇ俺がいるんだから、女性が勝つとは限らねぇだろうがバカどもが」

クラス中が正論によって静まる。

一夏「それに織斑先生、いや千冬姉。あのことを言っても構わないか？」
千冬「まぁいいだろう。いずれはバレることになるさ」
一夏「わかった。俺は、篠ノ之束博士の愛弟子であり、束さんにも頭脳を認められた。さらに、俺が初めてＩＳを動かしたのは、白騎士事件の直後だ。そしてＩＳの実力も、千冬姉を超えている。なんせ小４の頃から鍛えられてきたからな」

えーーーーー！？！？クラス中が驚く。

一夏「これでもまだ女性が強いといいきれるか？」
鷹月「ご、ゴメン」

クラス中がざわめいている。

千冬「では一週間後、オルコットと織斑が戦うということでいいな？」

はい！とクラス中揃って言った。

はぁ。これから大変なことになりそうだ。

第三話　セシリア・オルコット（後書き）

一「作者よ……」

俺「なんだ？」

一「俺って口喧嘩が強すぎる」

俺「そうだな」

セシリア（以下、セ）「ふん」

一「なんだよオルコット。もう降参か？」

セ「後で吠え面をかくのはどちらでしょうね」

一「ぐぬぬぬ」

セ「むぎぎぎ」

俺「はいそこまで。次は一夏の原作との変更点及び設定だ。まだ明かされな部分もあるが、のちのち明かしていくんでよろしく」

一「またな」

セ「代表決定戦。読者のみなさんはわたくしを応援してくｒ……ってちょっ、まって、ここで終わらｓ……

設定　原作との変更点など

名前
織斑一夏
設定
キレると怖い
口喧嘩が強すぎる
篠ノ之束の愛弟子
初めてＩＳを動かしたのは千冬の次で全世界で２番目（小４の頃）
ＩＳの実力は千冬を超える
幼馴染は箒と鈴音含め四人鈴音はフォース幼馴染
家事はチートレベル
専用機は自分で造った
趣味は機械いじりもといＩＳいじり
体術、剣術もチート（剣術なら千冬より上）
戦うのが好き↑Ｎｅｗ
その他の設定は今後発表

専用機
名前は原作と変わらず白式
設定
コアのみを束に提供してもらい、あとは一夏が造った
原作と違い燃費が良すぎるほどにいい
スピードは全ＩＳ最強
武器は雪片弐型意外にも３つある
武器
近接戦闘用ブレード《神羅（しんら）》

切れ味こそ雪片に劣るがシールドエネルギーを使わないために普段はこれを使っている
薙刀《騎龍(きりゅう)》
斬撃による近距離挟撃、投擲による遠距離攻撃の両方を可能にした薙刀
攻撃力は神羅より下だが、投げても任意のタイミングで手中に召喚することができる
マシンガン《クルセイダーｖｅｒ．６．２０》
一夏が改良に改良を重ねたマシンガン
総弾数は１億発を超える
一発一発の威力もそこそこ
今後さらに改良されｖｅｒ．アップさせる予定
単一仕様能力(ワンオフ・アビリティー)は原作同様
その他は今後発表

設定　原作との変更点など（後書き）

一「これが俺の設定だ。うーんいつ見てもチートすぎる」

俺「そうだな。しかも幼馴染が四人だし。あの人とあの人だろ？」

一「そうそう。今も昔も変わらず面倒くさいやつだよ（でも俺はあの人が……）」

俺「まぁいいか。おい、予告」

一「そうだった。次回は俺の寮の部屋が決まる。みんなちゃんと読んでくれよ」

俺「読まないと風穴」

一「作者それキャラどころか作品が違う」

俺「俺この作品の二次創作も書いてるから間違えちゃった。テヘペロ♪」

一「それは箒の中の人の領分だろ」

俺「気にしたら負けだ。じゃあ、またな」

一「おいおいこれで終わりって……まぁ、またなー」

第四話　寮でのやり取り（前書き）

寮でのやり取り忘れてた

第四話　寮でのやり取り

俺は携帯端末で専用機「白式」の調整をしている。すると……

山田「ああ、織斑くん。まだ教室にいたんですね。よかったです」
一夏「はい？」

山田先生が書類を片手にやって来た。

一夏「どうしたんですか？」
山田「えっとですね、寮の部屋なんですけど」
一夏「ああ、決まったんですか？」

元々は一週間ほど自宅からの通学だったが、千冬が手を回していたようだ。

一夏「荷物は？」
山田「それなら――――」
千冬「それなら私が手配した。ありがたく思え」
一夏「織斑先生がですか？」

嫌な予感しかしない。

千冬「生活必需品だけだがな」
一夏「ま、まさか……着替えとケータイと充電器はあるとして、俺のＰＣは？端末は？ＩＳ関連の文献は？束さんからもらった書類は？」
千冬「ノートＰＣ、端末は持ってきた。だが文献と束の書類の方は多すぎたのでな。今度の休みにでも取りに行け」

一夏「わかりました。ＰＣがあるだけでも良しとしましょう。でもやっぱりデスクトップも取りにいかないといけないな」

ノートＰＣだけではスペックなどに問題が出てくるし、デスクトップの方にしか入っていないソフトなどもある。だから問題が発生する可能性があるのだ。

山田「じゃあ時間を見て部屋に行ってくださいね」

そのほかにも夕食の時間や風呂が使えないことなどを聞いた。

一夏「あー、一応聞きますけど、一人部屋ですよね？」

千冬「いや、急遽部屋割りを変更したせいで二人部屋だ。まあアイツじゃないだけいいと思え」

一夏「あー、耐えられませんね。いろんな意味で」

一夏「ここか、１０２５号室」

ドアに鍵を差し込むが空回り。空いてる？全く千冬姉は無用心だな。

「誰かいるのか？」

シャワー室から声が聞こえる――――ん？

箒「ああ、同質の者か。こんな格好ですまないな。私は篠ノ之ほうｋ……」

バスタオルをまとって出てきたファースト幼馴染……ヤバイな。

一夏「ほ、ほう、き」ダラダラ

ヤバイ。俺、死んだ。汗が止まらない。

ズドン！

一夏がさっきまで立っていたところがえぐれていた。ヤバイ。ほんとに死ぬって。

一夏「お、おい。さっきのかわさなかったら死んでたぞ！」

大声を出す一夏。それに気づいて群がる女子。

「あっ、織斑くんだ」

「あそこが織斑くんの部屋かー。いい情報ゲット」

ヤバイ、早くしないと社会的に死ぬ。

一夏「箒、部屋に入れてくれ。じゃないと社会的に死ぬ」

沈黙。そしてガチャッという音が鳴った。

箒「……入れ」

箒「で、お前が同居人だと？」

一夏「お、おう。どうやら」

箒「どういうつもりだ。男女七才にして同衾せず！常識だぞ！お前

が希望したのか！？」
一夏「そんな馬鹿な」

あの人と同室なら希望してたかもしれない。アレ的に耐えられなくなるけど。

一夏「あ、あぶねえっ！」

真剣白羽取り。できるとは思わなかった。

一夏「束さんに認められた頭脳がバカになったらどうすんだ！」
箒「馬鹿……馬鹿だと？そうかそうか……それに姉さんばかり……」

ヤバイ、ハイライトが……

「篠ノ之さん大たーん」
「抜け駆けはダメだよ」
「織斑くん、総受け、男」

ヤバイ、最後のは寒気を感じたぞ。

箒「ま、まあ一緒に暮らすんだから、線引きは必要だ。まずはシャワーだが、私は七時から八時、お前は八時から九時までだ」

まぁいっか。これで大丈夫だろ。あっ。

一夏「トイレってどうするんだ？」

最重要事項である。

箒「知らん。先生に聞け」

こうして夜も更けていく

第四話　寮でのやり取り（後書き）

俺「結局ラッキースケベかよ。某上条さん並みに羨ましい」

一「俺としては不幸なんだよ」

俺「まあまあ、箒のあれが見れたんだ。いいじゃねえか」

一「よくねえよ。まああの人の……あれなら……だが」ゴニョゴニョ

俺「あの人の～から聞こえなかったんだが？」

一「なんでもねえよ／／／」

俺「なに、顔紅くしてんだよ」

一「……『白式』……」

俺「ちょっ、やめ、ＩＳ出したら死ぬ」

一「……この神羅のサビにしてやる……」

俺「やめ、ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

箒「次回、私と一夏が食堂で……ぜひ読んでくれ」

俺「そんな、ほっといてないで助け……いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

一「殺すころすコロスコロコロコロコロコロコロ……」

第五話　寮での朝食

「ねえねえ、彼が噂の男子だって～」
「なんでも千冬お姉様の弟らしいわよ」
「姉弟そろってＩＳ操縦者か～。やっぱり彼も強いのかな？」
「実力は千冬様以上のチートレベルらしいわよ」
「しかも篠ノ之博士の弟子なんだって」
「え～、それ凄すぎでしょ」

朝食に来た一夏と箒。やはりどこも一夏の噂で持ちきりだ。あろうことか上級生の注目の的にまでなっている。

「お、織斑くん、となりいいかな？」
一夏「別にいいよ」

ガッツポーズを決める三人。嬉しそうだ。

「あ～、私も早く声かければよかった～」
「まだ二日目。大丈夫、焦る段階じゃないよ」
「昨日のうちに押しかけた人もいるみたいよ」

ああ、来ましたよ。本当にたくさん。一年生が八名、二年生が十五名、三年生が二十一名自己紹介にね。もちろん全員の顔と名前は覚えた。

一夏「えっと君たちはうちのクラスの布仏本音さん、鷹月静寐さん、谷本癒子さんだっけ？」
谷本「そうそう」
鷹月「よく覚えてたねー」

本音「おりむーすごーい」
一夏「お、おりむーって。うちのクラスの名簿を入学前に貰ったからな」

そんな話をしながら飯を食べていると……

鷹月「織斑くんって朝すっごい食べるんだー」
谷本「お、男の子だね」
一夏「朝ちゃんと食わないともたないんだよ。俺は夜少なめに取るから。でもお前ら、朝そんだけで大丈夫なのか？」
鷹月「わ、私たちは、ねえ？」
谷本「う、うん。平気かなっ？」

……おそらく体重だろう。ここは口に出さないのが賢明だ……

本音「お菓子よく食べるしー」

だから体重が増えるんだよ……

箒「一夏、私は先に行くぞ」

不機嫌そうな箒が、先に教室に行ってしまった。

谷本「織斑くんって、篠ノ之さんと仲がいいの？」
鷹月「同じ部屋って聞いたけど……」
一夏「あいつは俺の幼馴染だ」
「「「え！？幼馴染！？」」」
谷本「え、それじゃあ――――」

谷本さんが質問しようとしたところで、聞きなれた声が響いてき

た。

千冬「いつまで食べている！食事は迅速に取れ！」

千冬姉！？なんで――――

千冬「私はここの寮長だ、遅刻したらグラウンド十週だ！」

どおりでなかなか帰ってこないはずだよ。寮長室は大丈夫なのだろうか？

千冬「織斑！！お前の場合は遅れたらグラウンド三十週だ！！！」

身内贔屓はいけませんよ千冬姉～～～。

第五話　寮での朝食（後書き）

千冬（以下、千）「なあ作者よ」

俺「なんですか？千冬さん」

千「なんでそんなにボロボロなのだ？」

俺「グスッ……訊かないで……ください……」

千「？？？まあいい。次回は授業で専用機について話す。授業はちゃんと訊いておけ。いいな！」

第六話　専用機

千冬「織斑、お前のＩＳだが、問題はないか？」
一夏「大丈夫。昨日もちゃんと整備してます。自分の専用機ですからそのくらいしませんとね」
千冬「自分の専用機はできる限り自分で整備するのが普通だ。ちゃんと整備しておくように」

専用機について話していると、やはりざわめいてしまう。

「せ、専用機！？織斑くん持ってるの！？」
一夏「ああ、束さんに協力してもらって、自分で造った」
「じ、自分で！？」
「いいな～。私も早く欲しいなぁ」

そんなことを言っていると……

千冬「織斑、教科書六ページ。暗唱してみろ」
一夏「『現在、幅広く国家・企業に技術提供が行われているＩＳですが、その中心たるコアを作る技術は一切開示されていません。現在世界中にあるＩＳ４６７機、そのすべてのコアは篠ノ之束博士が作成したもので、これらは完全なブラックボックスと化しており、未だ博士以外はコアを作れない状況にあります。しかし博士はコアを一定数以上作ることを拒絶しており、各国家・企業・組織・機関では、それぞれ割り振られたコアを使用して研究・開発・訓練を行なっています。またコアを取引することはアラスカ条約第七項に抵触し、すべての状況下で禁止されています』……まったく、束さんもムチャクチャやってるな……」

束さんは実際、４６８個目以降のコアをいくつか作ってたはずだけど……

「あの、先生。篠ノ之さんって、篠ノ之博士の関係者なんでしょうか……？」

束さんは箒の実姉だ。ＩＳを開発してからは上手くいっていないって聞いたけど……

千冬「そうだ。篠ノ之はアイツの妹だ」

うおーい！個人情報保護法はー！？秘匿情報じゃねーの！？

「ええええーっ！す、すごい！クラスに有名人の身内が二人もいる！」

「ねえねえっ篠ノ之博士ってどんな人！？やっぱり天才なの！？」

「篠ノ之さんも天才だったりするの！？今度ＩＳの操縦教えてよ」

箒に言い寄るクラスメイト。

箒「あの人は関係ない！」

大声を出す箒。盛り上がりが一気に絶対零度だ。

箒「……私はあの人じゃない。教えられるようなことは何もない。それにあの人のことなら、一夏の方が知っている。だからそっちに訊いておけ」

俺に押し付けるのかよ！？

俺を期待を孕んだ目で見てくるクラスメイト。

一夏「そんな期待を孕んだ目で見るな。言っておくが、有名人の身内だからってそいつをその人の家族としか見ないのは間違っている。俺だって、ブリュンヒルデの弟じゃなくて織斑一夏というひとりの人間として見て欲しい」

みんなが黙って座っていく。

千冬「さて、授業だ。山田先生、号令」

山田「は、はいっ！」

セシ「安心しましたわ。まさか訓練機で対戦しようとは思っていなかったでしょうけど」

正直こんな雑魚、訓練機でも余裕だ。

セシ「まあ、どうせ織斑先生より強いというのは嘘でしょうから。それに勝負は見えていますけど？さすがにフェアじゃありませんものね」

正直言うが、訓練機でも十分俺の一方的な勝利（ワンサイドゲーム）になるぞ。ノーダメージクリアも楽勝だ！

一夏「アンタの機体はブルーティアーズ。中距離射撃型の機体。イギリス特有のビット兵器搭載。しかし所詮は偏向射撃（フレキシブル）もできないどころかビット使用中にほかの行動ができないただの雑魚がほざくな」

セシ「……馬鹿にしていますの？」

一夏「別に」

セシ「ふん。そういえばあなた、篠ノ之博士の妹なんですってね」
ここに弟子もいるのですが……
箒「妹というだけだ」
ヤクザのような視線にセシリアもビビってるぞ。それに俺の話を聞いてねぇのかこの馬鹿は。
セシ「ま、まあどちらにせよクラス代表にふさわしいのはこのわたくしであることに変わりはありませんの」
一夏「そんな小物臭いセリフを吐いて、セシリアは去っていく」
セシ「あなた、心の声がだだ漏れですわよ！やっぱり馬鹿にしていますの！？」
一夏「何言いがかりつけてんだ。馬鹿にしているんじゃない。蔑んでいるんだ」
セシ「余計悪いですわよ！」
セシリアは去っていった。
一夏「箒、飯食いにいこうぜ。誰か一緒に行かないか？」
すかさずフォローを入れてやる一夏。
布仏「はいはいはいっ！」
谷本「行くよー。ちょっと待ってー」
鷹月「お弁当持ってきてるけど行きます！」

朝の三人だ。

箒「私はいい」

一夏「まあ、そう言うな。ほら、立て」

箒「お、おい。私は行かないと言っているだろうが。腕を掴むな」

そこまで言われると傷つくぞ。

箒「離せ！」

一夏「学食についたらな」

箒「今離せ！ええい」

体術か。そんなもんじゃ俺は倒せねえよ。

一夏「ほいっ」

手を瞬時に離し、飛び上がる。箒の後ろに着地して再び腕を掴んだ。千冬姉に鍛えられた体術なめんな。

布仏「え、えーと……」

谷本「何が起こったの？」

鷹月「気付いたら篠ノ之さんの後ろにいたんだけど……」

やっぱわからないか。瞬時に動いたからな。

一夏「そりゃ、千冬姉に鍛えられた体術だから、そんな簡単に見切れないよ」

鷹月「お、織斑くんって、かなり強いんだね……」

谷本「私たちやっぱり……学食は遠慮しておきます……」

あーあ。せっかく集まってくれたのに。

一夏「箒、飯食いに行くぞ」
箒「おい、いい加減に……」
一夏「黙ってついてこい」

最初からこうすればよかった。今更後悔する一夏だった。

第六話　専用機（後書き）

一「なあ作者、なんでそんなにボロボロなんだ？」

俺「……なんでもない……（自分でやったの覚えてないのかよ）」

鷹月（以下、鷹）「あのー作者さん」

俺「なに？」

本音（以下、本）「おりむーが怒ると怖い乗って本当？」

俺「思い出させないでくれ」ガクブル

谷本（以下、谷）「トラウマになってる……そこまで怖いのね」

一「まあ、いいや。じゃあ三人で予告お願い」

鷹，本，谷「はーい。次回は学食で織斑くんと篠ノ之さんが話します。さらに、剣道で二人が戦いますよー。お楽しみにねー」

一「ありがとう。じゃあまたなー」

鷹，本，谷「またねー」

俺「」ガクガクブルブル

第七話　剣道

一夏「箒、何でもいいよな。何でも食うよなお前」
箒「し、失礼なことを言うな。好みはある」
一夏「ふーん。日替わりでいいよな。鯖の塩焼き定食だってさ」
箒「話を聞いているのか、お前は！」
一夏「聞いてない。さっきのお前の言動、友達ができなかったらどうすんだよ、お前。高校生活、友達いないとつまらないだろ」
箒「頼んだ覚えはない」
一夏「ふつうこういうことは頼まれてもしないもんだ。あ、おばちゃん、日替わり二つ。食券はここでいいんですよね」

食券をカウンターに置く。右手しか使えないから不便だ。もちろん左手は箒を掴んでいる。

一夏「いいか、こういうことは、お前だからしてるんだ」
箒「なんだそれは」
一夏「おばさんには世話んなったし、幼馴染で同門なんだ。このくらいさせろ」
箒「……」

相変わらず昔から変わっていない。ほっとくとすぐ集団から浮いてしまう。

箒「その……ありが――――」
「はい、日替わり二つお待ち」
一夏「ありがとう。おお、うまそう」
「うまそうじゃない。うまいんだよ」

いい人だなおばちゃん。こんな人がいっぱいいれば、女尊男卑社会もちょっとは良くなるだろうな。

一夏「箒、テーブル、どこが空いてる？」
箒「……」
一夏「箒？」

またか。不機嫌になっている。

箒「向こうが空いている」

はぁ。ため息をつく一夏。とにかく二人分空いていた席に着く。

「ねえ。君が噂のコ？」

リボンの色を見るとどうやら三年のようだ。箒はますます不機嫌になる。
先輩は大人びている。容姿もなかなかのものだ。どうだ箒。こんな大人っぽさが社会で生きていくために必要なんだぞ。

一夏「たぶんそうですよ。俺、男だから噂になっても仕方ないですよ」

先輩は自然な動きで隣の席にかけ、腕をテーブルに乗せる。

「代表候補生のコと勝負するって、本当？」
一夏「そうですよ」
「でも君、素人だよね？私が教えてあげようか？ＩＳ」
一夏「すいません。素人じゃないしあんな雑魚如きに遅れは取りま

せんよ。なんせ俺は束さん――――篠ノ之博士の弟子で織斑先生よりも強いですから。稼働時間も軽く１０００時間はいきます」
「は？」

先輩の顔が（ 。Д 。）になっている。

一夏「相手が国家代表ならともかく所詮は候補生。しかもイギリス特有の武装であるビットを使いこなせていないヤツです。そんな雑魚、本気出せば１０秒で沈められますよ」

先輩の顔が（；。Д。）！になる。

「じゃあさ、君の動きを参考にさせて。試合のとき君を応援するから」
一夏「応援してくれるのは嬉しいですよ」ニコッ
「はうっ／／／」

顔を真っ赤にする先輩。一夏病である。

一夏「顔紅いですよ。大丈夫ですか」
「／／／」
箒「ふん」

箒がますます不機嫌に。

「ちょっと、大丈夫？」
一夏「ああ、この先輩の友人ですか？あとは頼みます」
「／／／」
「おーい、大丈夫ー？」
「……あの笑顔は、反則よ……／／／」

「じゃ、じゃあ私たちはこれで」

顔が真っ赤の先輩をもう一人が連れていった。

箒（なんだこいつは。軟弱者に成り下がって）

一夏「箒？」

箒「……剣道をしろ……（どうせ弱くなっているはずだ）」

一夏「剣道？放課後はＩＳの整備がしたいんだけど」

箒「鍛え直すんだ。軟弱のお前をな！」

一夏「でも」

箒「でもじゃない！どうせ弱くなっているんだろう！放課後に剣道場に来い！」

一夏「でもどうせお前じゃ俺に勝てないぞ？」

箒「それなら実力で証明しろ。いいな」

時は放課後。剣道場に来た俺たち。俺たちが勝負をすることを聞いて、たくさんのギャラリーが来ている。立会人は剣道部部長だ。

一夏「部長さん」

部長「なに？」

一夏「先に謝っておきます。防具と竹刀弁償します」

部長「へ？」

箒「おい、早く始めるぞ」

一夏「部長さん、合図」

部長「え、あ、はいはい。はじめ！」

勝負は一瞬だった。合図と同時に一夏が肉薄。箒に強烈な突きを繰り出した。壁まで吹き飛ばされた箒は呆然としている。

部長「え？何が起こったの？」
一夏「部長さん」
部長「あ、一本！」
一夏「防具と竹刀、弁償します。すいません」
部長「え？」
一夏「箒の防具を見てください」

見ると、箒の着ていた防具は完全に割れていて、一夏の使った竹刀は先端が粉々になっていた。
わずかな沈黙。直後、わぁ～～～～～～！！！と歓声が上がった。

一夏「じゃあ、俺はＩＳの整備がありますから、これで」ニコッ
部長「え、あ、うん／／／」
ギャラリー「／／／」

一夏病大流行。

箒「すごいな一夏は。よし、私も頑張ろう」

箒は新たな決意をした。

第七話　剣道（後書き）

俺「今日はゲストが来てるぜ」

一「ゲスト？」

俺「それは、緋弾と世紀の大魔術師の主人公、土屋・拓哉・クロウリー五世だぜ」

拓哉（以下、拓）「どうも」

一「ついに別作品のキャラが出てきた！？」

俺「心配するな。作者は俺だ。緋弾と世紀の大魔術師の作品説明頼むぜ拓哉」

拓「おう。この作品はこの俺、クロウリー五世がキンジ、アリアとともに事件を解決していくものだ。あと、この本文を読ませてもらったんだが、織斑一夏モゲロ」

一「なんで！？」

拓「気づいてないのかよ。一夏病だよ」

俺「ああ、俺も書いててモゲロって思ったね」

一「なんだよみんなして」

拓「まあいい。人生オワタ＼（＾ｏ＾）／作『緋弾と世紀の大魔術

師』。俺の活躍を見逃すな。俺は帰るわ」

俺「またそっちでもよろしくな」

一「ちくしょー。次回、ついにセシリアと戦うぜ。みんな、読んでくれよ」

俺「じゃあこのへんで。またな～」

一「またな～」

第八話　クラス代表決定戦（前書き）

今回からあとがきゲストが始まりますよ

第八話　クラス代表決定戦

明日は待ちに待ったクラス代表決定戦（ワンサイドゲーム）の日。

一夏「ふぅ。ついに明日か。セシリアをボコボコにする日は」

俺は寮の一室で眠れない夜を過ごしていた。

一夏「ヤベェ、楽しみすぎて寝付けねぇ」

しかしセシリアも馬鹿だ。なんの対策もせず俺に挑むとはな。

一夏「明日はどんなふうに遊んでやろうかな」

こうして夜は更けていく。

クラス代表決定戦。第三アリーナのピットに3人の人影。一夏、箒、千冬だ。

箒「本当に大丈夫なのか？」

一夏「ああ、あんな雑魚、遊んでやるさ。本気で行ったら１０秒で沈むことになるぞアイツ」

千冬「まあ織斑、油断しないようにな」

そんなふうに話していると――――

山田「お、織斑くん、織斑くん織斑くん」

山田先生が呼んでいる。

一夏「落ち着いてください。はい深呼吸」
山田「は、はいっ。す～～～～～は～～～～～～～、す～～～～～～は～～～～～～～」
一夏「はい、そこで止めて」
山田「うっ」
一夏「……」
山田「ぶはぁ！まだですかあ？」

止めるタイミングを見失っていた。
がごんっ！

千冬「目上の人には敬意を払え、馬鹿者。本当にお前は昔から変わらんな。人をからかうことが大好きなままだ」

がごんっ！なんて音、どうやったら出席簿から出せるのかって？企業秘密である。

一夏「で、どうしたんですか山田先生？」
山田「そろそろ時間です。準備をしてください」

という。よっしゃ、いっちょ遊んでやるか。

千冬「織斑、さっさと展開しろ」
一夏「はい（来い『白式』）」

白式が展開される。そこにあるのは純白をまとった戦士である。

千冬「問題はないか？」
一夏「誰が整備してきたと思ってんですか？」
千冬「ふっ、そうだな。では行ってこい」
一夏「箒」
箒「な、なんだ？」
一夏「ボコボコにしてくる」
箒「ああ。あんなヤツ相手に遅れは取るな」
一夏「もちろん」

セシ「あら、逃げずに来ましたのね」
一夏「誰に口聞いてんだよ雑魚が」
セシ「ぐっ。チャンスを上げようかと思いましたが、やめましたわ」

セシリアのブルー・ティアーズが射撃体制に移行する。

セシ「お別れですわね」

《スターライトｍｋ？》がエネルギー弾を発射する。だが当たるわけもなく外れてしまう。

一夏「ふん、やはり所詮はこんなものか」

一夏は《騎龍》を展開する。

セシ「中距離射撃型のわたくしに、近距離格闘型の装備で挑もうだなんて、本当にあなたは強いんですの？」
一夏「馬鹿が。相手が知らない武装を使っている時は警戒するのが戦士の基本だぞ小娘」

一夏は全く攻撃をしないでかわし続けている。そう、遊んでいるのだ。

セシ（この方、全く攻撃してこない？遊んでいますの？）

このまま試合は続く。

セシ「このブルー・ティアーズを前に、初見でここまで耐えたのはあなたが初めてですわ」

一夏「馬鹿が、余裕だよ」

セシ「その余裕がいつまで続くかしらね」

ＢＴ兵器《ブルー・ティアーズ》を展開した。

一夏（やっと来たか。お手並み拝見だ）

ビットは一夏を囲むように展開され、あらゆる方向から射撃をしている。だがやはり――――

一夏「やはり、偏向射撃（フレキシブル）もできない雑魚か。そろそろ終わらせるぞ」

一夏は《騎龍》をビットに向かって投げた。直撃してビットは大破する。

セシ「自分から獲物を捨てるなんて、馬鹿ですの？」

一夏「馬鹿はお前だ」

一夏の手の中には投げたはずの《騎龍》があった。
セシ「な、なぜ投げた武器が！？」
一夏「自分で考えな」
今度は《神羅》を展開した。一夏は目を閉じ、腰に《神羅》を添える。
セシ「目を閉じている？あなたは何を考えていますの？」

一方アリーナのピットでは――――
千冬「ほう、あの構え。代表候補性如きにあれを使うのか」
山田「なんですかあの構え？目まで閉じてるし」
千冬「居合だ」
山田「居合って居合斬りですか？」
千冬「そうだ。あいつの居合は、私より速い。まさに神速というわけだ。まさか、あいつ本気を出したわけではないよな」
箒「本気を出したらどうなるんですか？」
千冬「一瞬で勝負が終わる」
山田「一瞬！？代表候補が相手ですよ？」
千冬「あいつは本当に私よりも強い」
山田「えっ、あれって本当なんですか！？」
千冬「ああ」
箒「姉さんがいつも一夏と一緒にいたのは知っている。あいつは強すぎる。剣道や体術でも一瞬で終わった」
山田「本当にすごいんですね、織斑くん」
千冬「まあな。あいつは私の弟だからな」

観客席

食堂で一夏病にかかった先輩が見ている。

「織斑くん、目を閉じている？何をする気なんだろう」

剣道部部長はその問いに答えてあげる。

部長「あれはおそらく居合だろうね」

「居合？」

部長「そう。あの構えはおそらく居合。しかも織斑先生に鍛えられたそうだからおそらく、神速の居合」

「それじゃあ」

部長「セシリアちゃんはもともと勝てないと決まっていたはず」

「まあ、あのコ篠ノ之博士の弟子だしね。しかも起動時間は１０００時間を超えてるらしいよ」

部長「それはすごいわね。じゃあ、あの動きを参考にしたいし、ちゃんと見ておこうか」

「そうだね」

アリーナ

セシ「目を閉じるなんて、なめていますの？」

一夏「……フー……」

一夏は呼吸を整える。

セシ「ああ、もう。いきますわよ！」

ビットは射撃する。一夏はカッ！と目を見開き、一瞬で避ける。

そして、神速の剣が一閃。

セシ「な、何が起こったんですの？」

ビットは三つとも破壊された。

一夏「つまらない。少しだけ本気を出して終わらせるか……」

セシ「あなた、これでも手を抜いていますの！？」

一夏「抜いているも何も、一割も出してないぞ」

セシ「なっ、真剣勝負は全力を出すと言ってたではありませんか。あれは嘘ですの？」

一夏「もとより全力だぜ。『全力で遊んでいたんだ』」

セシ「ぐぅ」

一夏「見ておけ、これが俺だ」

一瞬で肉薄し、斬撃を繰り出し――――

セシ「かかりましたわ。ブルー・ティアーズは、６機ありましてよ」

一夏「そのくらい知ってるわボケ」

ミサイルが発射される前に、《神羅》をしまって《クルセイダーｖｅｒ．６．２０》を展開する。

《クルセイダー》をゼロ距離で射出。砲門を潰してしまい、そのまま《スターライトｍｋ？》も潰してしまった。

セシ「なっ、《インターセプター》！！」
一夏「おそい！」
《クルセイダー》をしまい、《雪片弐型》を展開する。そのまま数回斬撃を繰り出した。
『――――試合終了。勝者、織斑一夏――――』
その合図と共に、観客席からアリーナが揺れるほどに声援が上がった。

千冬「おまえ、まさか本気を出したのか？」
一夏「まさか。あれでも1割だよ」
山田「あれで1割。すごいですね～」
箒「その、一夏」
一夏「なんだ？」
箒「強いな、お前は」
一夏「俺は弱いよ」
箒「あんなに強いのにか？」
千冬「ああ、こいつは『強いが弱い』」
山田「どういうことですか？」
千冬「それは、自分で考えることだ」
千冬は話を切り上げ戻っていった。
セシ「今日の試合――――」

セシリアは思い出す。あの誰にも媚びない瞳(め)を。父親とは正反対である男を。

セシ「あの父とは全く逆ですわね……織斑、一夏」

名前をつぶやくだけでも、顔が熱を帯びるのがわかる。出会ってしまったのだ、自分の理想の男性と。『強く、凛々しく、誰にも媚びることない、強い男』と。

浴室では、ただ水の流れる音だけが響いていた。

第八話　クラス代表決定戦（後書き）

俺「さあ、今日から、他作者のあとがきゲストが来ることになっているぜ」

一「ついにそこまでしやがったか作者。で、第一回目は誰？」

俺「ｇｙｕｄｏｎ２８０ｙｅｎさんの『訳有りの記憶喪失でも生きていける』から如月音羽だ」

音羽（以下、音）「如月音羽だ。よろしく」

俺「早速登場作品『訳有りの記憶喪失でも生きていける』の紹介をどーぞ」

音「この作品と同じＩＳが原作だ。全身を大怪我した状態で発見された俺。そんな俺は記憶喪失だった。しかも開始早々ある登場人物の家の執事になるんだ」

一「ふーん。で、さすがにネタバレになるからそのある人物ってのは言えないんだろ？」

音「おう」

一「お気に入り登録件数は？」

音「俺がさっき見たときは１０１件になっていたぞ。あといまは３１話までアップされてる」

俺「じゃあ、今回はここまで。一言言って終わろうか」

音「あ、ああ。『訳有りの記憶喪失でも生きていける』ぜひ読んで欲しい。ではこれで」

一「じゃーなー」

俺「じゃあ一夏、次回予告」

一「次回はＩＳの訓練が中心だ。ぜひ読んでくれ」

俺「じゃあ次回のゲストもお楽しみに。またな～」

第九話　ＩＳの訓練（前書き）

あとがきゲスト　二人目です

第九話　ＩＳの訓練

朝のＳＨＲ。

山田「では、一年一組代表は織斑一夏くんに決定です。一繋がりでいい感じですね！」

女子は盛り上がる。山田先生は嬉々としてしゃべる。そして俺は――――

一夏「代表のこと忘れてた。なりたくなかったのに」ｏｒｚ

うなだれている。

セシ「”一夏さん”がクラス代表なら絶対に負けませんから、大丈夫ですわ」

”一夏さん”と一夏を名前で呼んだセシリア。一夏病、なおも拡大中。

「いやあ、セシリアわかってるねー」

「そうだねー。あんな勝負見せられたらもう織斑くんしかいないよねー」

「私たちは貴重な経験を積める。他のクラスの子に情報が売れる。一粒で二度おいしいねー」

商売にすんなよ……

セシ「そ、それでですわね」

こほんと咳払いをして、顔を紅くしながら言う。

セシ「わたくしにＩＳの訓練をつけてはもらえないでしょうか？あなたのような人に教えてもらえばわたくしももっと強く――――」

箒「あいにくだが、私が剣道の稽古を頼むのだ。こいつは剣もできるからな」

は？俺、箒に頼まれた覚えもないしどちらにも教えるつもりはないぞ。

一夏「あいにくだが、どちらにも教えるつもりはない。放課後は忙しいんだ」

そう、忙しいのだ。ＩＳの訓練をし、剣の練習をし、筋トレもしないといけないし、ランニングもしなくちゃいけない。その上ＩＳの整備もあるからだ。

箒，セシ「「なに（なんですの）？」」

俺を睨むな。

千冬「座れ、馬鹿ども」

バシンバシン！と二人を叩く。千冬姉はやっぱりすごい。

千冬「こいつの言うとおり、こいつの放課後は予定が詰まっているのだ。こいつの予定全てについていけるのか？ＩＳの訓練をして、剣も練習して、筋トレもして、ランニングをして、それからＩＳの整備もする。それについていける自信でもあるのか？」

反論の余地がなくなった二人。何も言えなくなったようだ。

千冬「まあいい。クラス代表は織斑一夏。異論はないな」

一夏を除く全員が声をそろえてはーいと返事。四面楚歌とはまさにこのことである。

千冬「ではこれより、ＩＳの基本的な飛行操縦を実践してもらう。織斑、オルコット。試しに飛んでみせろ」

言われて、瞬時に展開する。

千冬「織斑はさすがに速いな。オルコットも見習え」

そう言われて少しムッとするセシリア。

千冬「よし、飛べ」

同時、俺は飛び出す。セシリアも遅れてくる。

セシ「さすが一夏さんですわね。速いですわ」

一夏「伊達に６年もＩＳをやっていないさ。このくらい普通だ」

他愛もない話である。

セシ「あの、一夏さんのＩＳ訓練に参加してもよろしいかしら？」

一夏「ついてこれるならな」

セシ「絶対についていってみせますわ。そのときはふたりきりで――」
箒「一夏っ！いつまでそんなところにいる！早く降りてこい！」
通信から怒鳴り声。箒だ。
千冬「織斑、オルコット、急降下と完全停止をやってみせろ。オルコットの目標は地上十センチ。織斑、お前なら地上一センチでも大丈夫だろう」
セシ「了解です。では、お先に」
地上へ向かうセシリア。
一夏「まあ、仮りにも代表候補ってわけか。俺も行くぜ！」
完全停止も難なくクリアしたようだ。一夏はぐんぐんとスピードを上げ、本当に地上一センチの位置で完全停止した。
千冬「さすがだな。織斑、武装を展開しろ」
一夏「はい」
同時、０．１秒もかからず《神羅》を展開した。
千冬「０．０８秒といったところか。次、オルコット」
セシ「はい」
左手を肩の高さまで上げ、真横に腕を突き出す。それだけで《スターライトｍｋ？》が展開され、視線を送るだけでセーフティが外れた。

千冬「さすがだな、代表候補生。織斑は例外として、さすがに速い――――ただしそのポーズはやめろ。横に銃身を展開して誰を撃つ気だ。正面に展開できるようにしておけ」
セシ「でもこれは――――」
千冬「直せ。いいな」
セシ「……はい」

一言で黙らせる千冬姉。凄すぎる。

千冬「オルコット、近接用武装を展開しろ。織斑は射撃用だ」

はいと同時に行った俺たち。俺はすぐ《クルセイダーｖｅｒ．６．２０》を展開するが、セシリアは遅い。どうせ今まで射撃しかしてこなかったのだろう。

千冬「まだか？」
セシ「す、すぐです。――――ああもう、《インターセプター》！」

初心者向けの展開方法を使うセシリア。

千冬「遅い、実践でも待ってもらうつもりかお前は？」
セシ「実践では近接の間合いに入らせません」
千冬「織斑に懐を許したやつが何を言う」
セシ「あ、あれはその」

相変わらずなセシリアと千冬だった。

第九話　ＩＳの訓練（後書き）

俺「さあ、今日もゲストを呼んでるぜ！ｉｎｔｅｒｕさん作『力を求めし者』から、桜木美麗だ！」

一「いらっしゃい」

美麗（以下、美）「どうも。今日はよろしくお願いします」

俺「えっと、まず作品紹介をお願い」

美「はい。えっと、あらすじは『少年は悟った。力がなければなにもできない、力がなければなにも守れない、力がなければなにも救うことなどできない、力が、力がなければ・・・・・。そして少年は狂った。明るく、無邪気な性格も、冷たく、物静かな性格になり、ほとんど笑わなくなった。少年は誰かを守るために、力を欲した。そして少年は世界唯一の男性としてのＩＳ操縦者となり力を手に入れていく。これは切なくも温かい、ある少年の物語。』となっています。この作品と同じくＩＳを原作とした、チートな物語。ちなみに私は訓練機でもセシリア相手に楽勝だけど、一夏には手も足も出ないという設定になってるよ」

一「そっちの世界の俺も、チートすぎるぜ」

俺「はい、ありがとう。じゃあ、細かい情報を教えて」

美「お気に入り登録件数は現在４６で、今は１０話までアップされているよ」

俺「はい、ありがとう」

美「それと、こっちの世界の一夏って分かっていても思ってしまうんだけど、一夏モゲロ」

一「なんで！？」

俺「一夏病か。俺も思う、一夏モゲロ」

一「作者まで！？まあ、最後に一言よろしく」

美「はい、ｉｎｔｅｒｕ作『力を求めし者』ぜひ読んでね。じゃあね～」

俺「作者によろしく～。じゃあ一夏、次回は？」

一「次回は、俺の代表就任パーティと、フォース幼馴染が出るぜ。みんな読んでくれよ！」

俺「今日はここまで。またね～」

第十話　クラス代表就任パーティ（前書き）

都合によりあとがきゲストは終了いたします

第十話　クラス代表就任パーティ

「ふうん、ここがそうなんだ」

夜、ＩＳ学園の正面ゲート前に、小柄な体に不釣合なボストンバックを持っている少女が立っていた。

「えーと、受付ってどこ？」

ポケットから紙を出す。大雑把なのか紙はくしゃくしゃになっていた。

「本校舎一階総合事務受付……それがわからないのよ！！」

イライラしながら紙を再びポケットに戻した。しかしクシャッとなろうと気にしない。

「自分で探すわよ、自分で」

迷うよりも行動。そんなやり方の少女は『実践主義』なのか、はたまた『よく考えていないだけ』なのか……

（生徒でも先生でも、案内できそうな奴はいないわけ？）

しかし探しても意味はない。校舎はどこも灯りが落ち、気配を感じない。生徒はみんな寮にいるのだ。

――――出迎えがないにしろ、これは不親切すぎるんじゃない？政府にしても、１５歳の少女を異国に放るとか、何か思わないわけ？

少女は日本人（ジャパニーズ）によく似ている。しかしよく見ると違う。鋭角的で

ありながらもどこか艶やかな瞳。中国人（チャイニーズ）のそれである。

（もう、めんどくさいわね。空飛んで探そうかな……）

そう考え、「あたしＧＪ」と思ったが、どこぞの『電話帳』およそ三冊分相当の厚さの書物である学園内重要規約書を思い出し、やめた。

転入手続きも終わっていないのに学園内でＩＳを起動させたらどうなるか……最悪、外交問題にも発展してしまう。それだけはやめて欲しいと必死に懇願した政府高官の情けない顔を思い出し、少女の気分はちょっと晴れた。

（まあねー、私は重要人物だしねー。自重しないとねー）フンス

ドヤ顔の少女は考える。自分の倍以上の年の大人が頭を下げるのは実に気分がいい、と。

昔から少女は、『歳をとっているだけで偉そうにしている大人』が大嫌いなのだ。つまり今の世の中はものすごく居心地がいい。

女尊男卑。それもまたいいのだ。少女は、『男というだけで偉そうにしている子供』も嫌いだったのだ。

――――でもアイツだけは違った。

とある一人の少年を思い出す。その少年は少女が再びここに帰ってくる最大の理由となっていた。

再び、とは彼女は日本に住んでいたことがあるのである。

――――元気かな、アイツ。

まあ元気だろうけど。元気がない姿を見たことがない。そんなやつだったのだ。

「だから……でだな……」

声が聞こえる。見ると、少女がＩＳ訓練施設から出てくるようだった。どこの国でも訓練施設は大体同じような形だから、すぐにそうだとわかる。
――――ちょうどいいや。場所を聞こう。
声をかけようと、アリーナゲートへ向かう。

「だから、そのイメージがわからないんだよ」

その声を聞き、びくんと震える少女。足も止まった。
男の声――――それも、懐かしい、よく知る声に似ている。いや、おそらく同一人物だろう。
予期しなかった再開。少女は胸を躍らせる。
――――あたしってわかるかな？わかるよね？一年ちょっと会わなかっただけだし。
そう言い聞かせ、落ち着こうとするが落ち着けないのが現実。しかし自分だとわからなかったらどうしようという不安に思考が乱れる。
――――大丈夫。大丈夫！わからなくても、あたしが美人になったからわからないだけだろうし。
こんな時こそポジティブシンキング！少女は再び歩きだし――――

「いち――――」

声が裏返った。恥ずかしいな。あたし、ものすごく意識してるみたいじゃん。

「一夏、どうすればあんなに強くなれるのだ？剣道でも負けっぱなしだ」
一夏「箒、それならまず剣をもっと速く振れるようになれ。そうすればいずれ強くなる」

箒「まあいい、明日も手合わせしてくれ」
一夏「はいはい」

――――誰？あの娘。なんで親しそうにしてるの？ていうかなんで名前で呼んでるの？
さっきまでの恥ずかしさ、胸の高鳴りが嘘のように消え、ふつふつと苛立ちがこみ上げる。

それからすぐ、総合事務受付は見つかった。アリーナのすぐ後ろに本校者があったのだ。灯りがついていたので、そこだとわかった。

「えっと、それじゃ手続きは以上でおしまいです。ＩＳ学園へようこそ、鳳鈴音（ファンザンイン）さん」

愛想のいい事務員の言葉もどこか遠くにあり意識には届かない。
少女――――鈴音は、見るからに不機嫌で、唇を尖らせながら聞く。

鈴音「織斑一夏って、何組ですか？」
「ああ、噂の子？一組よ。鳳さんは二組だから、お隣ね。そうそう、あの子一組のクラス代表決めるためにイギリスの代表候補生と闘ったそうだけど、代表候補生相手にものすごく余裕で遊んでいたそうよ。で、結果クラス代表になったんですって。やっぱり織斑先生の弟さんなだけはあるわね」

噂好きは女性の性（さが）。その体現のような事務員を冷ややかに見つめる。
――――代表候補生相手に遊んでいたって、そんなに強いのかしら、アイツ。
鈴音は質問を続ける。

鈴音「二組のクラス代表って決まってますか？」
「決まってるわよ」
鈴音「名前は？」
「聞いてどうするの？」
事務員は戸惑ったように聞く。
鈴音「お願いをしようかと思って。代表、あたしに譲ってって――――」
鈴音は笑顔ながらも、バッチリ血管マークがついていた。

「と、いうわけでっ！織斑くんクラス代表決定おめでとう！」
「おめでと～！」
一夏「あ、ありがとな」

パン、パンパーン、パンパンパーンとクラッカーの乱射。俺の頭に乗ってきた紙テープは、心に重くのしかかる。
ちなみに今は夕食後の自由時間。場所は寮の食堂、一組のメンバー全員が、各自飲み物を手にワイワイと盛り上がっている、もとい騒いでいる。
みんなはおめでとうと言っているが、一夏にとっては全然めでたくない。なんなんだこのパーティ。

「いやー、これでクラス対抗戦も盛り上がるねー」
「ほんとほんと」
「同じクラスになれて、ラッキーだったよ」
「ほんとほんと」

おい相槌を打ってる女子。お前二組じゃないか。というかおかしいだろ。明らかにクラスの人数より多いぞ。

箒「人気ものだな、一夏」
一夏「ただのウーパールーパーみたいなものだろう」
箒「ふん」

花を鳴らしてお茶を飲む箒。なぜ機嫌が悪いのでしょうね。

「はいはーい、新聞部でーす。話題の新入生、織斑一夏君に特別インタビューをしにきました～」

オーと盛り上がる女子。オーじゃねえよ。

「あ、私は二年の黛薫子。よろしくね。これ名刺」
一夏「あ、はいどうも」
薫子「ではずばり織斑君！クラス代表になった感想を、どうぞ！」
一夏「えー……」

期待の眼差しでみんなが俺を見る。やめて、見ないで。

一夏「まあ、すこし面倒という気持ちもありますが、なったからには全力で頑張ります」
薫子「えー、もっとかっこいいセリフ行ってよ～。俺に触れると火傷するぜ、的な！」

前時代的ですね……

一夏「はいはいわかりました。えー、全校生徒誰であろうとＩＳ勝

負挑んできてください。俺は絶対に負けませんよ！」
薫子「おっけ～。少しだけ捏造すればいいや」

よ・く・ね・え・よ。

薫子「ああ、セシリアちゃんもコメント頂戴」
セシ「わたくしあんまりこのようなことは得意ではないのですが、しかたがないですわね。じゃあ――――」
薫子「やっぱいいや。織斑君に惚れたとか捏造すれば」
セシ「な、な」

俺に惚れる？ありえねえ。

一夏「何を馬鹿なことを」
薫子「え？そうかなー？」
セシ「そ、そうですわ！何をもって馬鹿としているのかしら？」

え、なんでセシリアが俺に起こるの？睨むなよ。

セシ「大体あなたは――――」
薫子「はいはい、とりあえず二人並んでね。写真撮るから」

おお、救世主（メシア）よ。

薫子「注目の専用機持ちだしねー。ツーショットもらうよー。あ、握手とかしてくれるといいかな」
セシ「そ、そうですか……そうですわね」

なぜそこでモジモジとするんだ？

セシ「あの、とった写真は？」
薫子「もちろんあげるよ」
セシ「でしたら着替え――――」
薫子「時間ないからダメ。はいならんで」

セシリアの手を引っ張る先輩。うん、”あの人”ほどじゃないが強引だ。

一夏「なんだ箒？」
箒「なんでもない」

睨まないで欲しい。

薫子「それじゃあ撮るよー。３５×５１÷２４は～？」
一夏「７４．３７５……って、語呂悪い！」
薫子「せいかい。気にしない気にしない」

デジカメのシャッターが切られる。……あれ？

一夏「なんでみんな入ってるんだ？」
セシ「あ、あなたたちねえっ！」
「まあまあ、セシリアだけ抜け駆けはないでしょ」
「クラスの思い出に、ね」
「ねー」

セシリアを丸め込みやがったよこいつら。ホント、女子の統率力ってＫＯＥＥＥＥＥＥＥ！！！

このあと、寮の部屋に戻ってすぐに寝た一夏だった。

第十話　クラス代表就任パーティ（後書き）

一「まだ対した出番はなかったが、フォース幼馴染が出たな」

俺「ん、ああ」

一「いやー、あいつが転入してくるとなると大変だな」

俺「そうかい。じゃあ今日は箒、次回予告お願い」

箒「ああ、次回はフォース幼馴染が転入してくるようだ。……おい、一夏。これはどういうことだ？……」

一「そ、それはえーと」

セ「あとでＯ・ＨＡ・ＮＡ・ＳＨＩですわ、一夏さん？」

一「え、それって、ぎゃぁぁぁぁぁぁぁ」

俺「モゲロ一夏。じゃあ、このへんで」

一「ちょ、助けｔ……

第十一話　転校生は……（前書き）

いよいよ”酢豚影薄幼馴染”登場

第十一話　転校生は……

「織斑くん、おはよー。転校生の噂聞いた？」

朝、席に着くなり話しかけられた。

一夏「転校生？今の時期に？」

今は四月。普通転入じゃなくて入学してくると思うんだが……しかも転入条件に国の推薦がある。つまり……

一夏「まさか代表候補？」

「そう。中国の代表候補生だってさ」

代表候補と言えば……

セシ「あら、わたくしの存在を危ぶんでの転入かしら」

うっせえよ、自意識過剰バカ。

箒「このクラスに転入してくるわけでもないのだろう？騒ぐほどのことではあるまい」

一夏「中国のねぇ……」

あいつを思い出すが、まさかな。まあ、代表候補だから強いだろう。戦いてぇな。

箒「む……気になるのか？」

一夏「ああ、すげぇ気になる。強いのかとか強いのかとか強いのか

とか」
箒「ふん、お前はそればっかりだな」
うるせえよ。悪かったな、好戦的で。
箒「お前に女子を気にしている暇があるのか？来月にはクラス対抗戦があるというのに」
セシ「そう！そうですわ、一夏さん。まあ、わたくしに勝った一夏さんのことですので負けることはないでしょう。しれに、お相手ならわたくしが務めさせていただきますわ。なにせ、このクラスで専用機を持っているのは、まだわたくしと一夏さんだけなのですから」
『だけ』を強調するなよ……それに俺は新しいやつと戦いたいだけだなんだが。
一夏「まあ、やるからには勝つさ」
セシ「そうですわ。ぜひ勝ってください」
「織斑くんが勝つとクラスみんなが幸せだよ～」
本音「がんばってね、おりむー」
「フリーパスのためにもね！」
谷本「今のところ専用機を持ってるクラス代表って一組と四組だけだから、余裕だよ」
まあ、誰が相手でもたいていは余裕だと思うんだが。
鈴「その情報、古いよ――――」
あー、聞きなれた声。この声は――――
鈴「二組も専用気持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優ｓ

y――――」
一夏「鈴、お前かよ」
鈴「ちょっと、喋ってる途中で言わないでよ。そうよ、中国代表候補生、鳳鈴音（ファンザンイン）。今日は宣戦布告にk――――」
一夏「カッコつけても全然似合ってねえぞ」
鈴「あーもう、喋ってる途中に言うなって言ってるじゃない！」
一夏「おい」
鈴「なによ！？」

そろそろどかないと――――
バシンッ

千冬「もうＳＨＲの時間だ。教室に戻れ」

鬼神の登場である。

鈴「す、すみません……また後で来るからね！逃げないでよ、一夏」
千冬「さっさと戻れ」
鈴「は、はいっ！」
一夏「……てかあいつ、いつの間にＩＳ操縦者なんかになったんだ？……」

口に出して後悔した。こんなことを言えば、決まって面倒なことになるのに……

箒「……一夏、今のは誰だ？知り合いか？えらく親しそうだったな？」
セシ「い、一夏さん！？あの子とはどういう関係なのですか？」
「ねぇねぇ織斑くん、今の誰？彼女？」

バシンバシンバシン！

千冬「席に付け、馬鹿ども」

いつもは嫌いな出席簿が、今日は天使に見えた。

そして今日も一日ＩＳの訓練と学習が始まる。

第十一話　転校生は……（後書き）

俺「ついに登場、鳳鈴音。よろしくな」

鈴音（以下、鈴）「ああ、あんたが作者ね。よろしく」

一「久しぶりだな、鈴。一年ぶりか？」

鈴「そうね」

俺「ああ、感動の再会もいいが、今日は時間ないんだ。鈴、手短に予告を頼む」

鈴「おっけー。次はあたしと一夏の食堂での会話が主よ。是非次も読んでね」

俺「じゃあ、ここまでで終わるか。じゃあな～」

鈴「またね～」

一「またな～」

第十二話　食事と言い争い（前書き）

久しぶりの更新です
一夏がキレます

第十二話　食事と言い争い

一夏「ふぅ。やっと昼休みか……」

俺、織斑一夏は、机に突っ伏した。

一夏「そういやなんで授業中に箒とセシリアは叩かれたんだ……？」

と、呟くと……

箒「お前のせいだ！」

セシ「あなたのせいですわ！」

こう返ってきた。

一夏「うるせぇな、自分の非を他人に押し付けるな。話は学食で聞いてやる」

ということで俺は学食に向かった。そこで迎えていたのは……

鈴「待ってたわよ、一夏！」

鈴音（バカ）だった。俺たちの前にどーん、と立ちふさがり邪魔なことこの上ない。

一夏「邪魔だ鈴（バカ）。食券出せねぇし通行の邪魔だ」

鈴「う、うるさいわね。わかってるわよ！それにアンタ、鈴って書いて不名誉なルビ振らなかった！？」

一夏「メタな発言は控えろ、バカ」

鈴「今度は直(じか)にバカって言ったわね！！！！」
一夏「いいからさっさとどけよ」
鈴「ふん」

俺はさっさと日替わり定食の食券をおばちゃんに渡す。

一夏「ま、兎に角久しぶりだな。一年ぶりになるのか……」
鈴「そうね」
箒「あー、ゴホンゴホン！」
セシ「ンンンッ！一夏さん？注文の品、出来てましてよ？」
一夏「そか。テーブルは向こうが空いてるし、、行くぞ」

俺たちはテーブルにつき、話を始めた。

一夏「で、なんでテメェはまたこっちに来るときに連絡寄越さなかったんだよ！？」
鈴「それじゃあ劇的な再開ができないじゃない。それより、アンタこそ何ＩＳ使ってんのよ」

はぁ、変わらない奴だな……

箒「一夏、そろそろどういう関係か説明して欲しいのだが」
セシ「そうですわ！一夏さん、まさかこちらの方と付き合ってらっしゃるの！？」

疎外感を感じた箒、セシリアは少々トゲのある言い方で聞いてきた。ったく、付き合ってるとか言ったせいで注目されてんじゃねえか。好きな人がいる身としては、この手の噂は避けたいってのに。

一夏「あ〝ぁ？俺がこんなヤツと付き合う？ハッ、バカも休み休み

言いやがれ！」

俺は一気に不機嫌になり、ドスの効いた声で答えてやった。

鈴「ちょっと、何不機嫌になってるのよ！そんなに嫌なの！？」

一夏「うっせぇよ」

はぁ……。噂になっていないことを願うしかねぇな。

一夏（そういや、幼馴染と言えば。あいつらにも会っておかねぇとな……）

箒「幼馴染……？」

箒はそう聞き返す。

一夏「そういや箒は知らないんだったな……。箒は小四の終に引っ越しただろ？コイツは小五の頭に転向してきたんだ。で、中二の終わりに帰国したから、一年とちょっとぶりってわけだ」

わすれてた、こいつらが面識ないってこと。

一夏「まぁ、箒が一番目の幼馴染、仮にファーストとすると、鈴の知らない二人の幼馴染もいて、そいつらがセカンドとサード。で、鈴がフォースってことだ」

箒「ちょっとまて！？」

鈴「まだ私の知らない幼馴染が二人もいるの！？教えなさいよ！？」

一夏「お前らには関係ない。これ以上散策するな。これ以上聞いてくれば生身で剣術勝負だ。あ、勿論真剣ね」

箒と鈴は身震いした。

一夏「鈴、こいつは箒だ。前に話しただろ？剣術道場の娘だよ」
鈴「ふぅん」

鈴と箒はお互いまじまじと見ていた。

鈴「初めまして。これからよろしくね」
箒「ああ。こちらこそ」

普通に見ると初めて知り合って仲良くなった友人のように見えなくもないが、実際はバチバチと視線がぶつかり合っていた。

セシ「ンンンッ！わたくしの存在を忘れてもらっては困りますわ。中国代表候補生、鳳鈴音さん？」
鈴「……誰？」
セシ「なっ！？わ、わたくしはイギリス代表候補生、セシリア・オルコットでしてよ！？ご存知ないの？」
鈴「うん。あたし他の国とか興味ないし」

セシリアは赤く、ゆでダコのようになっていた。

セシ「い、い、言っておきますが、わたくしあなたのような方には負けませんわ！」
鈴「そ。でも戦ったらあたしが勝つよ。悪いけどあたし強いもん」

自分はエリートだと自慢するバカと慢心を抱いてるバカがいる。ちっと説教してやるか。

一夏「おい、セシリア。前にも言ったが、たかが代表候補の分際で偉そうにしてんじゃねえよ。俺は『たしかに、お前はエリートだろ

う。代表候補なんだからな。だが、相手のことをよく知らないで自分の立場を押し付けるような奴がエリートなんて、聞いて呆れる。しかも所詮代表候補だ。代表ならいざしらず、テメェは各国の代表候補全員を知ってるのか？』と言ったはずだが？鈴、テメェもだ。代表候補生だからって慢心を抱いてんじゃねえ。ＩＳだろうと生身だろうと、俺はお前ら二人を相手取って瞬殺できる。セシリアはそのことを身を持って体験しただろうが」

こう言うと、やはり鈴は言い返してきた。

鈴「なによ！アンタそんなに自信があるわけ！？だったらあたしと模擬戦しなさいよ！アンタが間違ってることを証明してやるわ！」

こうやってすぐ感情的になる。昔から変わってねぇ奴だ。だがこの状況で感情的になるなんてバカのすることだ。

一夏「ふぅ、すぐに感情的になるなんて愚の骨頂。相手に乗せられず、慢心も抱かず油断もしない。戦士の基本だボケ」

鈴「うっ……。で、でもアンタ、イギリス代表候補生なら何か言い返しなさいよ！」

セシ「そういえばそういうこともありましたわね……」

このあと、自分のうちで飯がどうだとか、自分の家でもそうだとか、一悶着あったが、鈴がこういってきた。

鈴「ねぇ一夏。放課後空いてる？」

箒「あいにくだが、こいつの放課後は空いていない。なにせ私が剣道の稽古をつけてもらうからだ」

セシ「それを言うならわたくしがＩＳの操縦を見てもらうのですわ！」

一夏「あのなぁ。俺の放課後はいつも忙しいって言ってるだろうが。剣道もＩＳの操縦も見ない。今日は放課後筋トレとＩＳの操縦を一人でするんだよ。邪魔するな」
鈴「じゃあそれが終わったら行くから、開けといてね。じゃあね」

鈴は食事を終え、走っていった。はぁ、俺の精神は休まらない。あの人に癒しを求めたい。

箒「なぜ全て一人でするのだ！？一緒にすればいいだろう！？」
セシ「そうですわ！それに一人では戦闘の訓練ができないでしょう！？」
一夏「はぁ。あのなぁ……」

そこで俺は一息ついて、爆発した。

一夏「お前らがそんなふうにケンカして邪魔になるから一人でするって言ってんだよ！それに束さんに認められた頭脳嘗めんな！一人で戦闘訓練くらいできるわ！」

俺はそう言い捨てて教室に戻っていった。

第十二話　食事と言い争い（後書き）

一「あー、キレたキレた」

俺「お、一夏。キレてスッキリしたか？」

一「ああ、久しぶりにストレス発散できた」

俺「そりゃよかった」

一「ああ、よかったよ。ったく、ここまでストレスが溜まったのは千冬姉のせいだ。千冬姉があの人以外の女子と同じ部屋にするから……」

ガゴンッ！！！

千「私がどうかしたのか？ん？」

一「いいえ。何でもありません……」

千「だいたいお前をあいつと同じ部屋にしたら、絶対お前は理性が持たないだろう？それにそもそも学年が――――おっと、ここからはネタバレになるな」

一「それもそうだな」

俺「ま、この二人はほっといて次回予告するぞ。次回、一夏のＩＳ戦闘訓練。ぜひ読んでくれよ」

一「ま、またな～」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9883w/

番狂わせな織斑一夏～つまりはチートな物語～

2011年12月11日22時59分発行